

日米部活動比較

―教員の労働環境改善に向けて―

庄子ゼミナール 1216104 鈴木 悠祐

1. 研究動機・研究目的

アメリカでは、シーズンによって部活動を変えるなど、一つの種目にとらわれない競技形態をとっていた。また教員が部活の先生をやることもあるが、主流は専門のコーチを雇って、報酬も競技レベルに応じて払われている。

日本の教師は超時間労働、未経験スポーツの指導、勤務時間に釣り合わない収入、過労、例を挙げれば多くの問題点が部活動で見られる。一方で、アメリカの部活動を見てみると、教員と部活動の指導員には、はっきりとした線引きがあるように感じた。労働時間については、中学校での教員の平均労働時間は1週間当たり56.0時間とされている。これは、労働基準法第32条の原則である「一週間に40時間・一日8時間」を基本労働時間と定めているのに対し大きく上回っている。日本の教員は、世界でもトップの労働時間である。各国の参加平均労働時間は38.3時間に対し日本は53.9時間と群を抜いていることが分かる。その原因の一つに「部活動」が影響している要因は大きい。スポーツ庁では各教育委員会に部活動ガイドラインを示したが教員の現状は変わったと言えない。日本で多くの問題が挙がるのに対し、アメリカでは部活動に対する問題が少ないのはなぜだろうか。根本的な部活動の制度に問題があるのか、または他の要因があるのか、教員という立場から日米の比較を行うことで日本の部活動の改善点が見つかると思った。

2. 研究方法

部活動ガイドラインが示されたが教員の現状は変わったと言えない。日本で多くの問題が挙がるのに対し、アメリカでは部活動に対する問題が少ないのはなぜだろうか考える。根本的な部活動の制度に問題があるのか、または他の要因があるのか、文献や考察を元に調査していく。部活動を生徒目線からでなく教員という立場から比較し、問題点や改善点を調査する。生徒にとって教員にとっても良い方法を考察していく。具体的には以下の4点を中心にデータを比較し考察を行う。①日米給料等の仕組み（正式に公表されているアメリカの教育委員会や日本の文科省のホームページから実際の給与比較、）②文献の集計（出版されている部活動についての考察をまとめる）③根本的制度（日本とアメリカの部活動の位置づけ）④大衆文化等の影響（日本の部活動に対するテレビドラマ、漫画といった大衆文化の影響を考察）以上を中心に日本、アメリカの部活動を比較していく。

3. 主な結果と考察

アメリカの部活動には、州に応じて明確なコーチ給料表がある。それは、示された達成度に応じてコーチの給料を変化させている。また、メジャーなスポーツとマイナースポーツを担当するコーチによって給料を変化させている。人気のあるメジャースポーツをレベルⅢと定め、マイナースポーツになるほど数字をⅣ、Ⅴとして、マイナースポーツになるほど、給料を下げている。これはマイナースポーツの方が結果を出しやすく、メジャースポーツの方が結果を出にくいいため、あらかじめ難易度を考慮していると推測した。またアシスタントコーチの表では、レベルや達成度に応じて階級（step）を10段階にも渡って示している。各段階に応じて、アシスタントコーチの給料も変わってくる。アメリカの部活動システムには明確な基準が示されていることが分かった。一方、日本の部活動は文部科学省のホームページ、各都道府県の公式ホームページといったインターネット等に部活動給料明細は記載されていなかった。メジャースポーツ、マイナースポーツに分けることなく、カテゴリー別に分けることもない。教員がどれだけ頑張っても、個人に対する報酬は明確になされていないのだ。日本の場合は、報酬を明確にしていなかったため、成果に応じて確実に報酬が出るわけでもない。部活に成果は出ても、何の見返りもなければ、教師のやる気も出ないと言える。教師は時間を生徒に捧げるのが当たり前だと感じざるを得ない。能力があり部活動に対して一生懸命で、結果を出している教師と、ただ部活顧問を請け負っている、名ばかりの教師が同じ給料というのはおかしな点である。前項目のアメリカとの明確さと比べると大きな違いであった。

4. 結論

ガイドライン等で部活動改革を行なっても変化が少ないのは、現職の教師たちに、「意識の差」が根強く残っていると推測した。「意識の差」とは、今までの良い教師像とのズレであり、自分の生活時間を削って生徒のために使うといった奉仕の精神である。この「意識の差」は、漫画や学園ドラマといったテレビドラマの影響も少なからずある。

上記を踏まえ、教員が現在の業務の進め方や取り組み方について最も影響を受けた時期について初任者から三年目と答えた人が51.3%と半数を超えていた。そして最も影響を受けた人物は、72.0%の教員が先輩と答えており、多くの教員が新人時代に先輩から影響を受け、それが現在の働き方になっている。働き方改革を実施しても、教員という仕事に右も左もわからない新人教師は、ベテラン教師の教えには忠実にこなしてしまう。働き方改革以前のいわゆるブラックな教員を新人教師は受け継ぐことになるからだ。この過程により働き方改革や部活動ガイドラインの定着がなかなか進まないと推測した。

これからの教員には、学校が変われたという姿、そして学校はブラックではなく魅力ある職場であることを見せることが大切であると結論付けた。

5. 卒業論文の執筆を終えて

卒論のテーマでもある日米部活動比較を終え、日本は、部活動に対し確実に改革を行

わらなければならないと感じた。アメリカの明確な資料に対する日本の曖昧さは十分に危機感を持てるはずだ。世間での教員のブラックさは認知されつつある。認知だけにとどまらず、行動を起こせるよう、若い世代である私たちが実行していかなければならない。今回、卒論を書くに当たって多くのことを学ぶことができた。また、卒論を書くにあたってゼミ担任の庄子先生には大変お世話になり、感謝している。感謝を述べると共にまとめとする。